慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロンドンの松方正義：ロンドン金融市場と日英同盟(田村茂教授退任記念号)
Sub Title	Masayoshi Matsukata in London, 1902(InHonour of Professor Shigeru Tamura)
Author	玉置, 紀夫(Tamaki, Norio)
Publisher	
Publication year	1994
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.37, No.1 (1994. 4) ,p.47- 54
JaLC DOI	
Abstract	1902年初夏,松方正義は,はじめてイギリスを訪問した。日英同盟調印直後の松方来訪を,イギリスは大歓迎した。松方訪英とイギリスの歓待は,もとより日英同盟がその動機であった。しかしそれはまた,来るべき時機への双方の瀬踏でもあった。その時機とは,いうまでもなく1904-5年の日露戦争であった。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19940425-04084298

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第37巻第1号
1994年 4 月

1994年1月17日掲載承認

ロンドンの松方正義

——ロンドン金融市場と日英同盟——

玉置紀夫

<要　約>

1902年初夏，松方正義は，はじめてイギリスを訪問した。日英同盟調印直後の松方来訪を，イギリスは大歓迎した。松方訪英とイギリスの歓待は，もとより日英同盟がその動機であった。しかしそれはまた，来るべき時機への双方の瀬踏でもあった。その時機とは，いうまでもなく1904—5年の日露戦争であった。

<キーワード>

大隈重信　松方正義　中井芳楠　高橋是清　A．A．シャンド，J．H．シフ，ランズダウン卿　エドワード7世　ロスチャイルド，大蔵省　日銀　正金　ケンブリッジ大学，オックスフォード大学　正貨　外債　日露戦争

1859年7月の開国以来，在日イギリス人は，日本の金融問題に対して助言や協力を惜しまなかった。世界の金銀比価が1対15であることも知らず，国内での比価1対5のままで開港した幕府に対して，もっとも強くその早期の改定をすすめたものの一人は，イギリス領事ルザフォード・オールコック（Rutherford Alcock）であった。明治維新政府が造幣に着手したとき，イギリス人技師2名を斡旋し機械の調達を取図らったのは，イギリス公使ハリー・パークス（Harry Parkes）であった。明治初年，はじめての外債発行がイギリス人ホーレイショ・レイ（Haratio Lay）の詐欺的発起でつまずきかけたとき，オリエンタル銀行（Oriental Bank）横浜支店長ジョン・ロバートソン（John Robertson）の連絡で同行ロンドン本店が業務を受継いで，発行を成功させた。

国立銀行条例が公布され，参議大隈重信が大蔵省を掌握した1870年代中期，チャータード・マーカンタイル銀行（Chartered Mercantile Bank）元横浜支店長代理，アレクサンダー・シャンド（Alexander Allan Shand）の大蔵省顧問採用によって，上述の趨勢はクライマックスに達した。シャンドは，73年から77年はじめまで，大蔵官吏や若手銀行家に，イギリスの銀行簿記やその業務を教えた。80年2月，大隈参議は，薩長派が彼を追い落す為に強行した太政官制の少変更によって大蔵卿を

去ってからも，財政イニシアティブの確保に必死であった。このため大隈は，横浜正金銀行（正金，と略）の本店支配人にシャンドを，政府顧問にロバートソンを招聘し，インフレーションをはじめとする財政問題解決に当たらせることを計画した。だが，「明治14年政変」によって大隈が閣外へ追放されて，この計画は頓挫した。大隈の失脚がこの挫折の原因であったが，外国人の重用，とりわけ政府部内への採用には，つよい反感も存在した。ポスト大隈の時代に財政を主導した松方正義も，こうした考え方の一人であった。

大隈，松方の財政を一貫する課題は，いかにして正貨を蓄積しうるかであった。松方正義は，1881年10月，参議・大蔵卿に就任した。松方にとって幸運なことに，悪性インフレはかれの就任以前に峠を越していた。この好機をとらえて松方は，フランス蔵相レオン・セイの助言を具体化し，ベルギー国立銀行に範をとった日本銀行（日銀，と略）を成功裡に設立し，正金の機能を強化し，85年5月，念願の日銀兌換銀行券発行に成功した。以来松方は，1900年まで大蔵省と金融制度に君臨した。最後の蔵相を辞して2年後，松方ははじめて訪英した。松方訪英は，日本外交念願の日英同盟条約調印の直後であった。それはまた，正貨獲得の成功による日本金本位制の誇示であるとともに，次代の正貨獲得策への布石でもあった。

松方伯爵のロンドン，1902年4月28日—5月24日，6月22日—29日。

松方伯一行は，1902年4月28日，ロンドンに到着した。これは松方にとって，四半世紀ぶり2度目の訪欧で，はじめての訪英であった。松方は，その20年になんなんとする財政指導者としての経歴にもかかわらず，国外ではほとんど未知の人物であった。4月29日の『タイムズ』紙は，「国内行政の域に局限されてきたので，その成果が松方伯を（国外が）注目する地位におくことがなかった」と，その原因を指摘した。また銀行専門誌『バンカーズ・マガジン』5月号は，大礼服を勲章で飾った松方の肖像写真を掲載して，「彼の祖国，およびあまねく世界に対する彼の貢献は，わが国の政治家や財政家が正しく評価していない」と，かれにたいするイギリス人の無知を諫めた。

『タイムズ』も『バンカーズ・マガジン』も，松方の経歴と業績について短いが誠に正確な解説を掲載した。『バンカーズ・マガジン』は，松方に「勲一等の財政家」という‘称号’を与えた。『タイムズ』は，松方の歓迎が，数か月前におとずれた伊藤博文のそれに比して，いかなる意味においても劣るものであってはならない，と力説した。[1] ‘日露同盟’をかつて摸索した伊藤にたいして，松方が‘日英同盟’への最後のひとおしをした人物であることを『タイムズ』は，知っていたのかもしれない。[2] 事実，イギリスの松方歓迎ぶりは，伊藤の待遇をはるかに越えるものとなった。

1) 伊藤訪英も，もちろん『タイムズ』がこれを報道した（1901年12月25日付をみよ）伊藤訪英については，I. Nish, *The Anglo-Japanese Alliance: the Diplomacy of Two Island Empire*. (London, 1966), chapter 9をみよ。
2) *Ibid.*, p.195

1902年4月30日，1月に日英同盟に調印したばかりのイギリス外相ランズダウン卿（Lord Lansdowne）主催の晩餐会が松方を主賓にむかえた。その2日後に松方在英の最初のハイライトが早くも到来した。5月2日，イギリス国王エドワード7世がバッキンガム宮殿で松方を引見した。伊藤はこの栄に浴することができなかった。5月6日，松方は，マーチャント・バンカーの象徴ともいうべきロスチャイルドの自邸に招待された。広大な情報網を持つロスチャイルドは，松方の何者であるか，かれが何を目論でいるかを，早くも察知していたのかもしれない。5月8日，松方は，ホテル・メトロポールでひらかれた日本協会（Japan Society of London）の晩餐会に招待された。日本公使林董の主催でひらかれたこの会合では，日本国歌が歌われた。[3] この夜11時，松方の一行は，グラスゴウにむけて出発した。

5月9日朝からの4日間の松方の視察は,30年前の岩倉視察団の足跡を辿るごときものであった。9日午前，松方はグラスゴウ到着早々，クライドバンクの造船所を訪れた。グラスゴウ市長招待の午餐をすませると松方一行は,午後3時グラスゴウを発って，同夜9時，ニューカッスルに入った。翌10日，武器製造のアームストロング社工場と，同地の牧場を視察した。11日午後4時ニューカッスルを出発した松方一行は，その夜おそくシェフィールドに到着した。翌12日早朝，ヴィッカーズ社の製鉄所を見学し，即座にリヴァプールへ移動して港湾倉庫施設を見て，同夜おそく松方はロンドンに帰った。松方視察が岩倉のそれと決定的に異なっていたのは，松方一行が何処でも多くの日本人見習技師に出迎えられた点であった。岩倉から30年を経て，日本のイギリス先進技術習得は最終段階に達していたのである。

5月13日，松方は午餐をロンドン市庁において，晩餐を外相ランズダウン卿私邸において，うけた。後者では外相に親しい関係者や『タイムズ』外信部長も同席した。それは次にくるクライマックスのプレリュードであった。14日夕刻,，再びホテル・メトロポールでイングランドの銀行協会（Institute of Bankers）主催の松方歓迎晩餐会が開催された。来会者は，イギリス蔵相をはじめとする政界，法曹界，そして銀行界から，160名余にのぼった。蔵相を初めとする3人の来賓の演説に対して，松方は日本語で答辞をのべた。松方答辞は，「日本は近来新時代に入るの状況に在り。その国際関係に於て又特に財政経済上の状態に於て革新の時に在り」[4] と冒頭に指摘し，次の言葉でしめくくられた。

> 往時を回想すれば，大英国が我国に対し通商条約改正の交渉に率先して承諾を与えられたるの厚誼を以てし且最近に於ては殊に東洋の平和を主眼とする両国間の同盟協約を成立したり即ち将来両国は益々親密なる交誼を尽し更に一般貿易の隆盛を見るに至らんこと切望に堪え

3) *The Times*, 9 May 1902.
4) 『松方正義関係文書』（1979/1993），第5巻　30頁。

ざるなり。[5]

松方がこの答辞の序と結語でいわんとしたことは，そのままこの小論が論述しつつある対象そのものであった。

このクライマックスの２日後，５月16日，サンドイッチ伯爵の招待で，ハンティンドンのその豪壮な邸宅に招待された。翌17日，松方一行は馬車で近くのケンブリッジ大学を訪れた。松方は，同大のセント・ジョンズ・コレッジで，２人の著明な同コレッジ・フェロー，ハーバート・フォックスウェル（Herbert Somerton Foxwell）[6]とアルフレッド・マーシャル（Alfred Marshall）[7]と午餐を共にした。午後，キングズ・コレッジの学長が松方一行をケンブリッジの街に案内した。

松方は５月24日に一旦ロンドンを離れるまで，上述の多忙なスケジュールの合間に在ロンドンの日本人からも歓待された。５月５日，正金，三井物産，大倉商事などの実業家がサボイ・ホテルで晩餐会を開いた。５月18日，正金の招待で松方はテムズ川をボート遊覧した。５月20日，再びサボイ・ホテルで松方は，大谷光瑞の開催した宗祖誕生記念晩餐会に招かれた。一旦離英して，１か月後の６月23日，再び松方はロンドンに戻り，そこからオックスフォード大学オール・ソールズ・コレッジに迎えられた。翌24日，松方は林董とともに日本人としてはじめて，ＤＣＬ，すなわち，法学名誉博士号（honorary degree of the doctor of civil law）を授与された。オックスフォードのＤＣＬは今日では，国家元首のみに授与されるものであった。松方は，６月29日，ポーツマスからイギリスを去った。

正金・ロンドン支店―松方財政の橋頭堡

大隈財政最終期の産物である正金が，外国御用荷為替，すなわち政府融資による輸出前貸を採用したのは，大隈閣外追放の１年前であった。だがその仕組が十全に動きだして，正貨収集の機能に大いに役立ち始めたのは，1881年10月，松方が参議・大蔵卿に就任し，翌82年３月，輸出前貸規程をあらため，この改定が折からの景況好転と重なったからであった。80年夏に上記の輸出前貸業務の採用をきめるや，正金は直ちにニューヨークへ，81年１月にはロンドンへ，それぞれ出張員を派遣した。ロンドン出張員派遣は，ニューヨークのそれに一歩おくれたが，ロンドン店は，程無く正金海外支店の第一位の地位を確立することになる。[8]

1884年，それまで日本政府のロンドン代理店をつとめていたオリエンタル銀行が閉鎖されると，

---

5) 前掲書，31頁。

6) ケンブリッジ大学セント・ジョンズに所属しながら，ロンドン大学の経済学教授をも兼任した。希有の蔵書家で，その主要部分は，ロンドン大学ゴールドスミス図書館の蔵書の基礎となり，残部はハーバード大学に買収された。かれの弟は，1870年代，帝国大学教授であった。

7) ケンブリッジ大学経済学教授。

8) 正金初期の経済については，拙稿 'The Yokohama Special Bank―多国籍銀行分析，1879-1931，'『三田学会雑誌』（1990年）をみよ。

正金・ロンドン出張所は，急拠，支店へ昇格されることとなった。それまで日本領事館内で執務していたロンドン正金出張員は，同じビショップス・ゲイトの領事館近くの建物へ引越した。ついで，日本の旧友アレクサンダー・シャンドをつうじて，正金は，かれのいるアライアンス銀行（Alliance Bank），ロンドン・ジョイント・ストック銀行（London Joint-Stock Bank），ロンドン・ユニオン銀行（Union Bank of London），およびロイズ銀行（Lloyds Bank）とコルレスをひらいた。

1889年からの一年は，正金にとって二重苦の年であった。外国為替業務をめぐって日銀との対立が頂点に達し，米不作，それにつづく銀価高騰によって莫大な損失をこうむったからである。大蔵省の主導下で双方をきりぬけたものの，正金は，その組織に大変更を加えた。松方・大蔵当局は，ロンドン総領事園田孝吉を正金頭取に据え，ロンドン支店を金貨圏の中心店とし，本店外国為替主任の中井芳楠を同支店長として派遣した。中井はロンドン正金に91年始め着任した。

中井のロンドン正金は，中井着任の4年目に重大な試練に遭遇した。1895年春の日清戦争和平の下関条約に基づいて清から日本へ3億6000万円，すなわち95年の国民所得の28%にも相当する額の賠償金が，支払われることとなったからである。日本側は，支払地をロンドン，支払手段を英貨ポンドとすることを要求し，清側はこれを承諾した。ロンドン正金の中井は，イングランド銀行に交渉して，正金勘定の開設をもとめた。永年これを拒絶してきたイングランド銀行は，資金の巨大さをみて即刻同意した。分割支払の第一回分調達のために清政府は，フランスとロシアの銀行の手をつうじてパリで外債を発行した。その手取金は，フランス大蔵省証券の形態でイングランド銀行に回送された。そして95年10月31日，イングランド銀行において，正式の受領式が催された。その際の受領書には，駐英日本公使加藤高明が署名し，イングランド銀行チーフ・キャッシャーのボーウェン（H. G. Bowen）が証人として署名を添えた。日本側の受領事務はいうまでもなくロンドン正金がすべてこれをととのえた。翌96年1月，ロンドン正金支店長中井に，日本政府から，第2回支払以降の受領事務がすべて委任された。

清政府は，1896年以降，香港上海銀行（Hongkong & Shanghai Bank Corporation）をはじめとするイギリスの銀行，ディスコント・ゲゼルシャフト（Discont Gesellschaft）らのドイツの銀行などに依存する外債発行手取金によって，98年5月までに，総額3800万ポンドを支払った。この最後の支払時にロンドン正金からイングランド銀行に払込まれた小切手券面‘£11,008,855. 16s. 9d’は，1694年設立の同行の歴史上，同行の知るかぎり最高額の小切手であった。この一枚の小切手が示唆するように，日清戦争賠償金授受は，イングランド銀行が市場への影響を考えて，一顧客に特別な注意を払った希な一例であった。[9)]

ロンドン正金の次なる難問は送金であった。上記の巨額の賠償金のうえに，1897年，99年の2度

9) R. S. Sayers, *The Bank of England*, (Cambridge, 1986), p.40.

に亘る外債手取金1300万ポンドも総金額に加算されたのである。空前絶後の送金業務は，ロンドン正金の中井と，本店支配人高橋是清[10]の間で綿密に打合せられた。送金手段は，金現送と，ポンド，ドルなど外貨建手形の送付の２つに限定されていた。ロンドン金市場の相場を混乱させぬよう，とくに注意が払われた。必要と考えられる際には，銀購入にきりかえられた。より安全な方法はいうまでもなく，外貨建手形の購入であった。しかしこの方法にも２つの注意が必要であった。金購入と同様に相場を乱さぬよう，正金は，ロンドンのみならず，ニューヨーク，サンフランシスコ，ボンベイ，香港，上海などできるだけ多数の市場で，日本を支払地とする手形を買入れた。他の注意点は，輸入手形の回避であった。すでに貿易収支の赤字は，たえざる悩みの種であったので，それが外債建であっても輸入決済のためであれば，貿易収支の悪化が促進されるからであった。

1895年から1903年までの間，正金は，4900万ポンドを日本へ送金した。このうち66％が外債建手形で，28％が金または金貨で，のこる６％が銀または銀貨であった。この業務は，96年，6860万円，97年，7320万円，98年，１億4220万円，1900年，7470万円，1902年，640万円，1902年，2000万円という貿易収支の赤字を衝いて敢行された。加えてこの規模の送金にも拘らず，関係地の日本領事館からの報告は異常をつげなかった。『バンカーズ・マガジン』も，「金融市場への逼迫効果は無いようである[11]」と報じた。この賠償金受領・送金業務の成功は，ロンドン正金の中井の名を一躍ロンドンで高めた。日本の銀行家で『バンカーズ・マガジン』にはじめて肖像写真を掲載されたのはこの中井であった。日本の銀行家として同誌にはじめて追悼文を記載されたのもかれであった。

中井のロンドン正金が送金した日清戦争賠償金は，日本をして軍事費の支払いのみならず多くの事業を可能ならしめた。1897年の金本位制もそのひとつであった。1902年５月14日，松方がイギリスの銀行家や政治家をまえに，日本が「財政経済上の…革新」を遂げたとのべたのは，まさにこの点であった。松方の発言は，旧幕体制の覆滅からわずか30年で，先進国のみの採用しうる金本位に弊制を置きえたことの誇示であった。金本位採用によって，後進国日本は，金融市場に係る限り，先進国イギリスに直結した。この直結は，日英同盟という心強い後楯によって，松方が同じ発言で期待した，日英の「益々親密な交誼」を，程なく実現するのである。

日露戦争軍事外債―日英同盟，アレクサンダー・シャンド，ジェイコブ・シフ。

1904年２月10日，日露戦争が勃発した。日本政府は，松方正義と井上馨の２元老を戦時財政顧問として，直ちに軍事費調達のための外債発行を決めた。このために，松方の強いすすめで日銀副総

10）高橋は，1895年８月，日銀からこの職位に移動してきた。かれの先任者は，小泉信吉であった。小泉は，90年始め慶應義塾長をやめて日銀に入行し，91年，正金本店支配人となって古巣に戻った。小泉と入れ違いに，ロンドンへ赴任した中井は，小泉と同じ和歌山の出身で慶應義塾の後輩であり，この先輩の勧めで，80年10月，正金に入行したのであった。小泉は，94年12月，急逝した。

11）1897年号，p.585.

裁高橋是清がニューヨークとロンドンへ急派された。高橋はすでに周知のように松方財政末期の10年間に，日銀建築主任から出発して，正金副頭取を経て，このとき上記の地位にいた。松方はもとより，ロンドン在日本領事・正金頭取の経験のある園田孝吉も第一線を退き，そのうえ永くロンドン正金を指揮した中井芳楠がこの前年に急逝したいま，高橋をおいて，外債募集の役を演じられるものはいなかった。1904年2月末に日本を発った高橋は，ニューヨークでの外債発行打診が不首尾に終わったのを見届けて，同3月，ロンドンに入った。

同盟国イギリスでは，高橋の出足は好調であった。アライアンス銀行を合併・吸収したパーズ銀行（Parr's Bank）の支店長代理となっていたアレクサンダー・シャンドは，日本旧知の人物であった。高橋自身も少年時代，かれのメッセンジャー・ボーイとしてマーカーンタイル銀行横浜支店に勤務したことがあった。高橋とシャンドの関係を軸に，高橋到着から1か月程で，パーズ銀行，香港上海銀行，正金のシンジケートが結成された。ここで高橋は，難問に逢着した。この3行のシンジケートは，日本の必要とする予定額1000万ポンド（1億円）の半額しか発行しないこととなったからである。[12] しかしこの頓挫は，イギリス2行の資金力の限界にも，ましてやロンドン金融市場の調達力の限界にも，よるのではなかった。そこには，きわめて高度のイギリス側の政治的判断が働いていた。

永い栄光の孤立を捨ててまで東洋の一後進国と同盟を結ぶことが，他の列強から少なからざる反発をよぶことを承知していたとはいえ，イギリスは，日英同盟締結理由の第一たる日露戦争が勃発すると，局外中立国でありながら，資金面で唯一の日本支援国となることをおそれた。この危惧をはらうためには，この同盟が日本にアジアにおけるフリー・ハンドを与える，として批判的であったアメリカ合衆国も起債国とすることが肝要であった。しかし高橋はすでにニューヨークで失敗していた。この形勢挽回に最も重要な役割を演じたのは，エドワード7世の側近で，その経済顧問であるアーネスト・カッセル（Ernest Cassel）であった。カッセルは直ちに，彼の四半世紀来の友人，アメリカのインヴェストメント・バンカー，クーン・ローブ商会（Kuhn, loeb & Co）のシニア・パートナー，ジェイコブ・シフ（Jacob H. Schiff）を選んだ。もとよりシフにとっても，日露戦争で日本に荷担する‘大義’があった。

アメリカ合衆国のユダヤ人の間で指導的地位にいたシフは，世界のどこであれ，ユダヤ人迫害があればこれに重大な関心を持った。折りからロシアでは，ツア体制のユダヤ人差別が強くなっていた。1900年，ツア政府の蔵相が，同じユダヤ人の好から，ロシア大蔵省証券のアメリカでの起債をシフに依頼してきたとき，ツア体制のユダヤ人迫害を理由にこれを拒絶し，加えて，「我々は，用い

12) より詳細は，高橋是清『自伝』（中公文庫上・下）第16章，およびC. Adler, *Jacob H. Schiff, His Life and letters* (New York, 1929), vol.1. Chapter VIIをみよ。

ることのできるあらゆる影響力を行使して，ロシアがアメリカ金融市場に足場を築くことに抵抗すべきである[13]」とさえ断じた。

高橋がニューヨークを訪れたとき，シフは，ロシアのユダヤ人迫害をより具さに観察するためにはヨーロッパを旅行中であった。1904年4月4日，フランクフルトについたシフは，ロンドンのロスチャイルド卿に書簡を送って次のように述べている。

> 残念ながら，ツア支配地の不幸な我同胞にとって，困難はなお待ち受けている。そして彼等にとっても，ロシア自身の利益のためにも，望み得るのはただ次のことだけである。すなわち，ロシアと日本の衝突が，その結果に於いて，ロシアがいまそのうえで支配されている根本的状態に，…動揺をもたらすことである。[14]

この書簡のあてられたロスチャイルドこそは，その2年前に松方がはじめてロンドンを訪れた時に，国王と外相の次に松方を‘瀬踏み’した，そのひとである。この書簡を認めて2週間を経ずして，シフは，午餐会で高橋の隣に座り，翌日，日本国債残額500万ポンドの発行を引受けたのであった。[15] 日本国債1000万ポンドの英米双方での発行決定の報告を受けたエドワード7世は，シフとカッセルを午餐会に招待して労をねぎらった。[16] 松方のロンドン訪問は，早くも2年にして結実したのであった。

結　語

日本金融制度形成における松方正義の成功は，極言すれば，あらゆる手段を用いる正貨蓄積にあった。このための仕組は，政府資金，もしくは低利の日銀資金を正金に貸下げて，輸出前貸を行わしめ，代金を正貨，もしくはポンドやドルの外貨で回収するものであった。ロンドン正金は，松方正貨政策の国際金融市場に懸けられた橋頭堡であった。財政政策における松方のこのような基本姿勢は，かれをして少なくとも反イギリスやロンドン無視にする訳がなかった。財政家松方は，自然の成行きからして親イギリスたらざるをえなかった。

松方のロンドン訪問は，かれの基本姿勢をイギリスの要路に印象づけた。日露開戦の1年前，1903年2月，エドワード7世から授与されたナイトの最高勲章（Grand Cross of St. Mechael & St. George）は，その返礼であった。開戦直後，高橋がロンドンに馳せ参じたとき，その2年前に松方を歓迎した人々，すなわち国王にとっても外相にとっても，そしてロスチャイルドにとっても，松方はなお記憶に新しいひとであった。

---

13) Adler, *op. cit*, vol.2, p.123.
14) *Ibid.*, pp.121-2.
15) 高橋，前掲書，下巻，pp.203-4.
16) Adler, *op. cit*, vol.1, p.216.